

授業改善・授業力向上を 目指す校内研究の進め方 ～協働による授業づくりを通して～



平成30年3月
宮城県大河原教育事務所

発刊に当たって

当管内においては、学力向上が最も重要な課題の一つとなっており、児童生徒にとって分かる授業づくり、自己肯定感や自己有用感を味わえる授業づくりとその充実を図ることがこれまで以上に期待されています。

一方で、近年は、経験豊かな教員の大量退職と初任者層の増加という世代交代期を迎えており、これまで蓄積されてきた優れた教育技術などの継承が途絶えないようにする必要があります。

また、今年度から指導主事訪問の形態を各学校が校内研究を中心に教員全員が協働で授業をつくり、代表者の授業を全員で参観し協議する「B訪問」を中心とすることとしました。そのねらいは、一人一人の教員が「子供の学校生活の中心は授業である」という原点に立ち戻り、学校が組織として「子供の声を聴き・ほめ・認める授業づくり」と「互いに認め合う学級づくり」のために校内での日常的な学び合いによる教員の指導力向上を図ることにあります。

これらを踏まえ、当教育事務所では、学校訪問を通して、児童生徒の実態を捉えて、どのように一人一人のよさを生かしながら集団としての学びの質を高めているか等の観点から授業を参観し助言を行うとともに、協働による授業づくりの更なる促進とその基盤となる校内研究の充実のための支援を行ってまいりました。

校内研究の充実は、様々な教育課題の解決を図ることに加え、日常的・継続的に授業改善に取り組む上で大変有効な機能を果たすものです。組織的な研究の積み重ねが、教員の指導力向上、ひいては子供の学力向上に結び付きます。また、教員が互いに切磋琢磨し学び合う中で、組織的・協働的・創造的な関係が育まれることで学校の活性化につながります。

本冊子を活用され、協働による授業づくりを通じた校内研究の一層の充実を図り、日々の授業改善と先生方の授業を中心とした指導力向上を目指していただければ幸いです。

宮城県大河原教育事務所

所長 鈴木 一史

目 次

今、なぜ、協働による授業づくりなのか	1
1 協働的・組織的な研究組織をつくりましょう	1
(1) 協働的・組織的な研究組織づくり	
(2) 研究推進上の研究組織の役割	
(3) 学校の実態に応じた研究組織	
2 研究の目的、内容、方法を明確にした研究主題を設定しましょう	2
(1) 研究主題の設定	
(2) 研究主題設定までの基本的な流れ	
(3) 研究主題の表現	
3 研究目標と研究の視点を設定しましょう	4
(1) 研究目標の設定に当たって	
(2) 研究主題へのアプローチ	
4 見通しのもてる研究計画をつくりましょう	7
(1) 年間計画の作成	
(2) 年次計画の作成	
(3) 研究全体構想図の作成	
5 検証のための授業研究を積み上げましょう	9
(1) 授業づくりの構想 (Plan)	
(2) 研究授業の実施 (Do)	
(3) 研究授業の検証 (Check)	
(4) 授業改善の視点の整理と次の授業へのつなぎ (Action)	
6 実践を振り返り研究のまとめをしましょう	15
(1) 協働による分析・考察	
(2) 研究のまとめ	
(3) 「研究のまとめ」(研究紀要、研究実践集録等)の作成	
(4) 「研究のまとめ」(研究紀要、研究実践集録等)の発信 (資料)「校内研究評価シート」(例)	

今、なぜ、協働による授業づくりなのか

子供たちの学校生活の中心は授業です。学力向上が喫緊の課題の一つとなっている今、私たち教員一人一人がこの原点を再確認し、学校全体が組織として「子供の声を聴き、ほめ・認める授業づくり」と「互いに認め合う学級づくり」に取り組んでいくことが重要です。そのために、教員同士が校内で日常的に学び合う協働による授業づくりが求められています。

1 協働的・組織的な研究組織をつくりましょう

(1) 協働的・組織的な研究組織づくり

校内研究は、各学校の教育課題の解決を図ることが目的です。校内研究に向けて教員が協働で取り組み、互いに切磋琢磨し学び合うことで、学校の組織が活性化され、教員一人一人の指導力向上につながり、子供たちの生きる力の育成につながります。

協働的・機能的な組織づくりのキーワードは、「全員参加」「一人一役」「共通理解」「各部の連携」です。

(2) 研究推進上の研究組織の役割

校内研究を円滑に推進するためには、研究組織が必要です。研究主任が中心となって研究推進委員会等の研究組織を運営するに当たっては、その組織の役割や具体的な作業内容を明確にすることが重要です。

【研究推進委員会の役割の例】

○校内研究の立案・推進

・年間計画の作成 ・研究全体会の資料の準備 ・研究全体会の進行 等

○校内研究の記録・まとめ

・研究全体会の記録 ・授業実践の記録 ・研究だよりの作成
・研究紀要の作成 等

(3) 学校の実態に応じた研究組織

研究実践を進めていくために、研究推進委員会の他に、研究主題や学校の規模などを考慮した、それぞれの学校の実態に応じた研究組織をつくる必要があります。

【研究組織づくりの例】

- 校務分掌を生かした研究組織
- 学年を生かした研究組織
- 教科群の特質を生かした研究組織
- 研究の特質の応じた研究組織 等

学校の実態を考慮した実効的な研究組織をつくることが重要です。



2 研究の目的、内容、方法を明確にした研究主題を設定しましょう

(1) 研究主題の設定

①研究主題に必要な条件

子供の生きる力の育成につながる確かな実践研究にするために、子供の実態や発達特性、園・学校の教育目標、教科・領域の目標や特性を踏まえ、課題性・明確性・実践性のある研究主題を設定し、研究の目的や内容、方法を明確にすることが大切です。

研究主題には、以下の条件を備えることが必要です。

- 研究に方向性を与えていくものであること【目的】
- 内容構造が具体化され、焦点化されているものであること【内容】
- どのような方法をとるのか明らかにされていること【方法】

②研究主題の設定に当たっての視点及び留意点

研究主題を設定するためには、その根拠が必要です。主題追究のための明確な理由があってこそ説得力をもつものになります。様々な視点から「なぜこの研究を行うのか」についてここで述べ、「主題設定の理由」を明らかにすることが重要です。

研究主題を設定する際の視点としては、以下のようなものが考えられます。

- 最近の教育課題やこれからの教育の動向
- 地域や社会の要請
- 園・学校の教育目標
- 児童生徒の実態・発達特性
- 教科・領域の目標や特質
- 研究の歩みと指導の反省 等

みんなで話し合う中から、学校を取り巻く課題を出し合い、様々な視点から研究主題を設定することが大切です。



研究主題は全職員が課題意識を共有し協働意識をもつものにするのが大切です。そうしないと、興味・関心をもちにくくなり、一部の教員のみになってしまう懸念があります。各教員の興味・関心や問題意識に配慮しつつ、根拠を明確にして全職員が参加できる研究にしていくことが重要です。

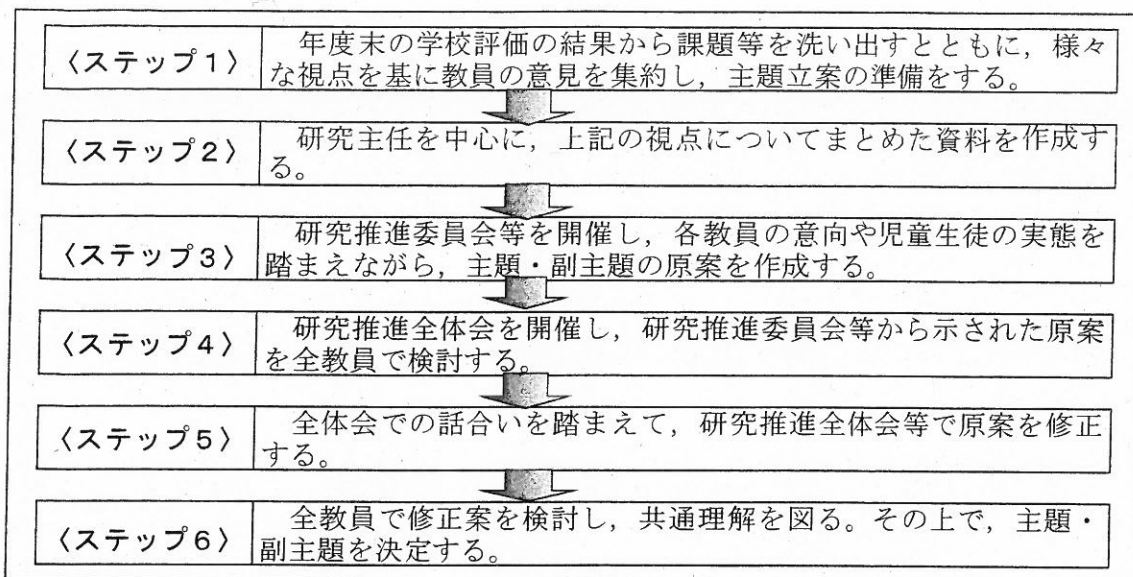
(2) 研究主題設定までの基本的な流れ

問題意識の共有化とそれに基づく議論の積み重ねによって協働意識が高まり、研究の活性化につながります。



研究主題の設定は、校種や学校規模を考慮した上で、次のようなステップを踏むことで、各教員の問題意識が喚起され、共通理解を図ることができます。

全職員が共有化された課題を基にして日常的に話し合いを重ねていくことによって、協働意識が生まれ、それが研究推進の原動力となります。



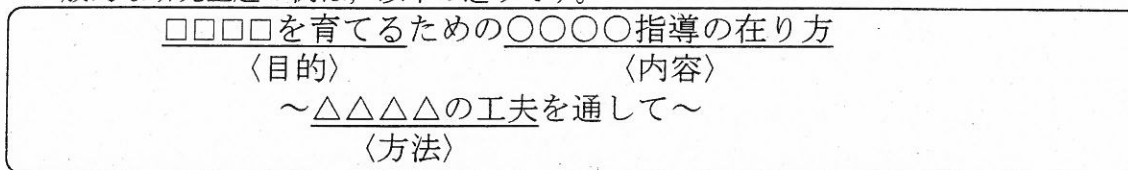
(3) 研究主題の表現

①研究主題の一般的な表現方法

研究主題は、その研究がどのような教育を実現しようかを示すものです。いわば、研究の顔であり、羅針盤としての役割をもちます。

「研究のねらい」(目的)や「対象領域・分野」(内容)を集約し、「研究の具体的な手立て」(方法)の3つの要素を含むよう端的に表すようにすることが大切です。

一般的な研究主題の例は、以下の通りです。

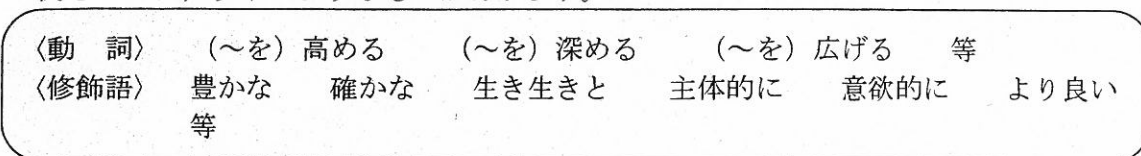


②研究主題表現上の留意点

主題と副主題は一体として吟味することが必要です。副主題における手立てを明確にすることで、真に主題に迫ることにつながります。

また、研究主題の中で「研究のねらい」を表現する際の動詞や修飾語を使う場合、具体的にどんな姿なのかを想定しておかないと、検証が困難になるので注意する必要があります。目指す姿を焦点化・具体化することで、研究で明らかにすべきことが明確となり、実践後の因果関係も明らかにしやすくなります。

例としては、以下のようなものがあります。



動詞や修飾語等の文言について、その押さえを明確にし、職員間で共通理解しておくことも重要です。



3 研究目標を設定しましょう

(1) 研究目標の設定に当たって

① 研究目標の意義

研究目標は、この研究で何を明らかにし、何を追究しようとするかを明示したものです。研究の目標には、研究の方向を示し、研究の達成度（ゴール）を示す意義があります。



研究目標を設定する場合には、研究の具体的な目的、内容、方法を協働で練り合い、焦点化していくことが大切です。

② 設定のポイント

研究目標は、研究主題と直結したものであり、目的、内容、方法を端的に盛り込みます。一般的な研究目標の例は、以下の通りです。

「対象領域・分野」

研究対象としている教科、領域、分野を限定し、対象の焦点化を図る。

「研究のねらい」

目指す児童生徒の姿を端的に表す。

〇〇〇〇の指導において、△△△△の工夫をすれば、□□□□になること
〈内容〉 〈方法〉 〈目的〉

を実践を通して明らかにする。

「研究の具体的な手立て」

具体的な方法、手立てを明示し条件整備を表す。

協働で設定した研究目標が、学校教育目標の達成につながるものになっているか、明確で具体性をもったものになっているか、みんなで再度、確認してみましょう。



③ 目指す児童生徒像の共通理解

児童生徒の実態を受けて、研究のゴールとしてどのような姿を目指したいのかみんなで共通理解しておくことで、日々の授業づくりや研究の方向性がぶれなくなります。

研究主題に迫るために、学校全体、学年等で目指す児童生徒像を示すと、学年の系統性が図られ、研究の方向性がより明確になります。

(2) 研究主題へのアプローチ

① 研究主題に迫るための2つの方法論

ア 仮説研究とは

研究主題に迫るための考え方や方法、研究の見通しや研究結果の予測の妥当性を演繹的に確かめる研究手法のことです。

イ 視点研究とは

研究主題に基づいて追究すべき視点を定め、その視点に沿った手立ての有効性と根拠を帰納的に明らかにする研究手法のことです。

ここでは、管内の多くの学校で進められている視点研究を中心に説明します。

②視点研究によるアプローチ

視点研究では、主題に迫るための視点に沿って具体的な手立てを明確に設定することが大切です。手立ての内容を精選し、観点や場面、方法などの焦点化を図ると、研究の方向性が明らかになり、教員同士の共通理解を深めることにつながります。

【視点を定めるまでのプロセスの例】

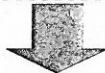
【児童生徒の実態】

- ・全国学力・学習状況調査で、コンパスを用いた平行四辺形の作図手順を求める問題の正答率が低かった。図形の特徴と作図方法の理解が結び付いていない。
- ・それぞれの図形の性質を関連させて、新たな図形を作図することが苦手である。
- ・平面図形、立体図形の空間認知力が育っていない。



【目指す児童生徒像】

- ・図形領域において、基礎的・基本的な知識や技能をしっかりと身に付けた児童



【指導の意図】

- ・単に作図の手順を示しながら技能を習得させたり、図形の特徴を覚えさせたりするだけでは、確実な理解・習得につながってるとはいえない。学習作業と学び合い、振り返りを交互に関連させることで、知識・技能の習得が図れるのではないかと。



【視点1】 学び合いと学習作業の連動

<具体の手立て>

- ・数学的な根拠を基に、より確実・簡便な学習作業の方法を相互に説明させる。
- ・学び合ったことを実践する学習作業、適用する学習問題に取り組む時間を設ける。

【視点2】 振り返りと学習作業の連動

<具体の手立て>

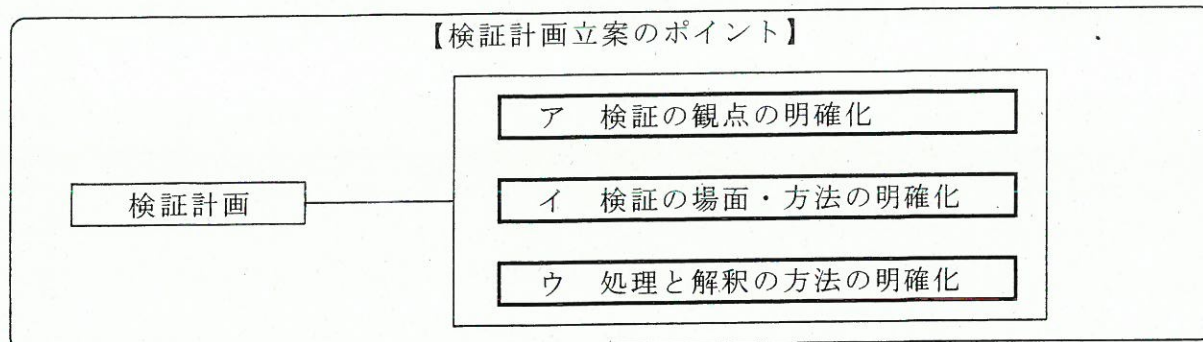
- ・全体で新たな気付きと習得した知識・技能を結び付ける教師の問いかけを行う。
- ・ねらいを受けた振り返りの観点を明示し、振り返りの記録を累積させる。

③手立てを踏まえた検証計画の立案

授業実践として「こんなことを位置付けてみたら、こんなところがよかった」ということを単に繰り返すだけでは、研究は深まりません。授業研究においては、授業実践を通してどのような場面において、どのような観点から、どのような方法で児童生徒を見取り検証するかを計画的に行う必要があります。

視点研究では、一つ一つの授業実践の検証記録を累積していくことが重要になります。そのためにも、検証計画を整備しましょう。

【検証計画立案のポイント】



ア 検証の観点の明確化

研究の視点と授業実践の単元等のレベルで具現化した手立てによって得られる児童生徒の変容を明らかにすることです。

イ 検証の場面・方法の明確化

研究の視点に基づく手立てが、授業実践のどの場面に位置付くのかを具現化し、どのような方法を用いて検証するのかを明らかにすることです。

ウ 処理と解釈の方法の明確化

児童生徒の発言や行動、ノートへの記述などの内容等から得られた情報を表にまとめたり、相関図に整理したりして処理を行うなど、検証の観点から分析し考察する方法を明らかにすることです。

授業実践の場面から得られたもの以外にも、学力テストやアンケートなどによる意識調査の結果を収集し、客観的な情報分析も取り入れましょう。

【検証計画作成のポイント】

項目	手立て	検証の観点	検証の方法	処理と解釈
視点1	○視点の具現化を図る具体的手立てを示します。	○学年や学年部ごとの具体的手立てにおける児童生徒の期待する姿を示します。	○手立てにおける児童生徒の反応や変容を見取る場面、見取る方法を示します。 ○検証に用いる学力テスト等を示します。	○検証の観点、方法に沿って得られたデータをどのような方法と内容で分析するかを示します。



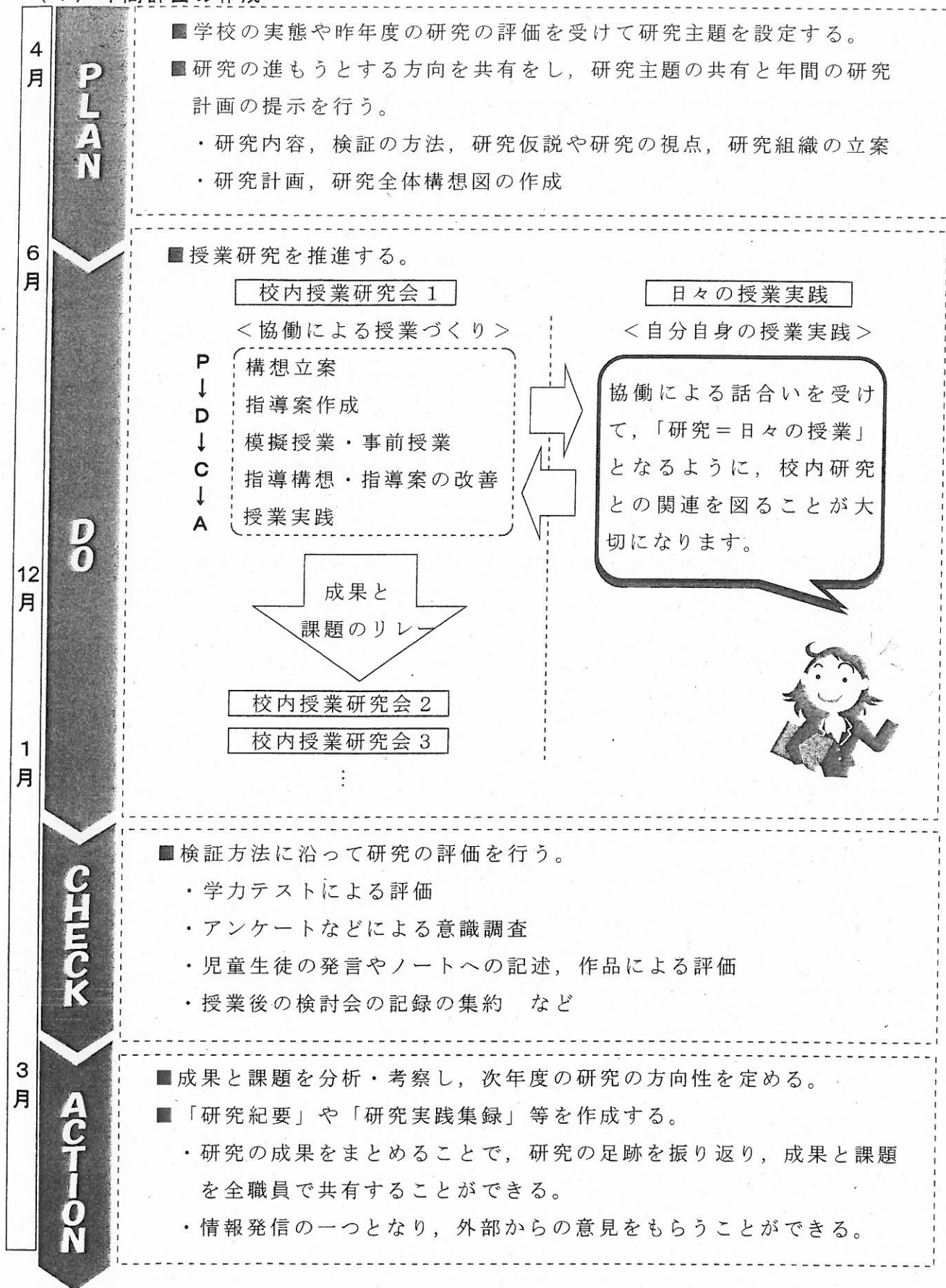
検証の観点を学年や学年部ごとに示すことで、期待する児童生徒像の系統性が明らかになります。
児童生徒の見取りの場面、見取りの方法も示しておくことで、みんなで授業を見合うときの見取りのポイントになって、協働での授業づくりに役立ちます。

検証に用いる学力テストの内容を確認していくことで、練習問題や適用問題の吟味にも生かされます。
具体的な分析方法や分析内容まで示しておくことで、協働での作業が見えるようになります。



4 見通しのもてる研究計画をつくりましょう

(1) 年間計画の作成



(2) 年次計画の作成

1年間を見通した研究計画と同時に、年度をまたいでの研究の見通しを作成しておくことも大切です。下表は、道徳科を研究教科とした場合の、3年間を見通した年次計画例です。このような簡単なものでも、一人一人が研究に対して見通しをもって取り組むことができます。計画は、研究の進捗状況に応じて変更することもできます。

(例)

平成	年度	平成	年度	平成	年度
道徳性の実態調査	-----	-----	-----	-----	-----
実態調査を踏まえた		資料分析の在り方	-----		
指導内容の重点化	-----				
年間指導計画の改善	-----				
授業研究	-----				
		体験活動との関連を図った	-----		
		指導の工夫	-----		
		評価の工夫	-----		
研究のまとめの作成	-----			(公開研究会)	-----

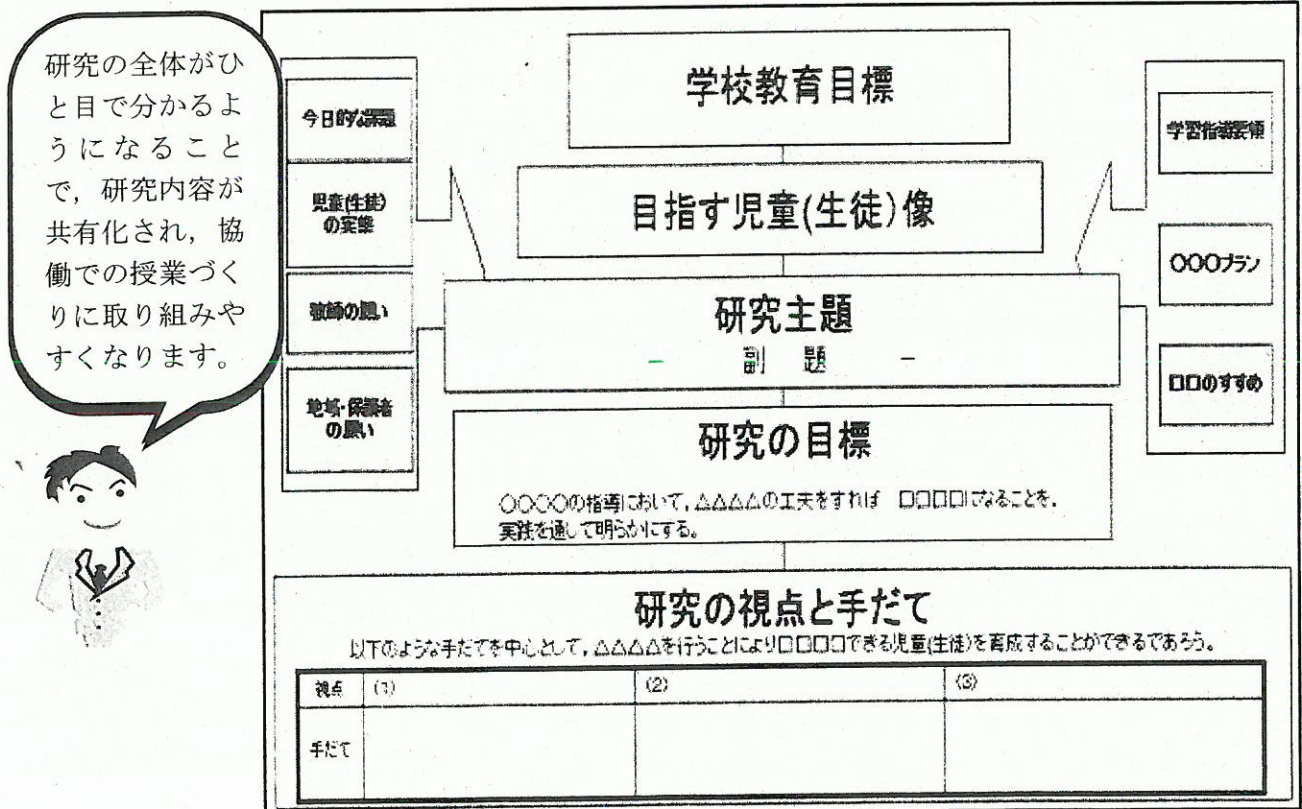
みんなで共通の見通しをもって研究を進めることが大切です。



(3) 研究全体構想図の作成

研究構想図は、研究の全体がひと目で確認できるものです。下図では、「研究の視点と手立て」までを表していますが、更に具体的手立てや研究組織などを表しておくことも考えられます。研究の概要との整合性を確認しながら作成することが大切です。

(例)



5 検証のための授業研究を積み上げましょう

(1) 授業づくりの構想 (Plan)

①丁寧な教材(題材)分析

- ア 単元の目標(ねらい)は明確になっていますか。
- ・研究授業をする教科等の「見方・考え方」が何かを明らかにしましょう。
 - ・この単元(題材)で、児童生徒に「何ができるようになるか(何を身に付けるか)」を明らかにし、そのために「どのような学びをさせるか」を定めましょう。
- イ 児童生徒の実態把握はできていますか。
- ・各種学力検査や全国学力・学習状況調査等の結果を活用し、児童生徒が「何を理解しているか」「何ができるか」を丁寧にリサーチしましょう。
 - ・児童生徒一人一人の実態から「どのような支援をするか」、具体的手立てを構想しましょう。

各種学力調査をみんなで解答してみるなどしながら、「どこが理解できていないか」、「なぜ身に付いていないか」など、誤答分析をみんなで丁寧に行うことが授業改善のヒントにつながります。



- ウ 協働で教材研究に取り組んでいますか。
- ・内容ごとに分担して教材分析する方法や、それぞれが教材分析した内容をつき合わせて検討する方法など、授業の柱立てとなる教材研究を協働で取り組みましょう。
 - ・学年や教科の枠を超え、協働による授業づくりに取り組むことで、日々の自分の授業づくりのヒントになります。多面的・多角的な教材研究を行いましょう。



授業者だけが教材と向き合うのではなく、みんなで教材研究を行うことで授業改善への気づきが多くなります。協働による創造力を大いに発揮しましょう。

②検証につながる学習指導案の作成

- ア 本時の目標(ねらい)に迫る学習課題(めあて)になっていますか。
- ・学習課題(めあて)は、授業を貫く柱です。学習課題(めあて)を見ただけで、児童生徒が授業で何を学んでいくか、どのような学び方をしていくかがイメージできるようにしましょう。学習課題(めあて)は「主体的・対話的で深い学び」につながるものです。
- イ 検証の観点となる具体的手立ては、実際に行う具体的指導になっていますか。

- ・研究主題から、研究の視点における具体的手立てを構想しましょう。具体的手立ては授業の中で実際に行う（活用する）指導・支援になるように示しましょう。抽象的な表現や漠然とした内容にならないように注意しましょう。

ウ 検証につながる指導過程に工夫していますか。

- ・授業の評価は、児童生徒の姿から見取っていくものです。教師の発問に対し、児童生徒がどう反応するか、教師の手立てに対し児童生徒がどのようにねらいに迫ろうとするか、具体的手立てによる「期待する児童生徒の姿」を下の例のように指導案の指導過程に示してみても良いでしょう。

【指導案の指導過程の項目例】

	学習活動と発問	児童生徒の反応	具体的手立てと検証の観点	留意点と評価
各 項 目 の ね ら い	学習活動を展開していく上での大切な発問構成を明記しましょう。学びを深めていくには、教師の発問や切り返しが大切です。	学習活動における児童生徒の予想される反応、教師の発問における予想される反応を想定しておくことで、本時のねらいから外れることはなくなります。	研究の視点に沿った具体的手立てを示しましょう。そして、具体的手立てによる「期待される児童生徒の姿」を示しましょう。それが検証の観点になります。	個に応じた支援や配慮を示しましょう。また、評価規準に照らした評価の視点と評価方法も示しましょう。本時の目標に対する検証の観点になります。
作 成 例	<p>・円の使って正三角形を作図する。</p> <p>T: 円とその中心を使って、正三角形をかくには、どうすれば簡単にかけるかな。自分のかき方をグループの友達と伝え合い、よりよい方法を見付けよう。</p> <p>C: (作図)</p> <p>C: (学び合い)</p> <p>T: コンパスだと簡単にかけたんだ。なぜなのか教えて。</p>	<p>C: 定規で辺の長さを測ればかけるよ。</p> <p>C: 半径は同じ長さだから、二等辺三角形のようにかけばいい。</p> <p>C: コンパスを使うと早いんじゃない。</p> <p>C: 長さを測るの面倒だ。</p> <p>C: コンパスを使いたいが、どこに軸を置けばいいんだろう。</p> <p>C: あれ、コンパスを使ったら正三角形が2つできちゃったぞ。</p> <p>C: 正三角形は3つの辺が同じ長さで、コンパスだといつでも同じ長さがかけるから簡単にかけると思う。</p>	<p>□作図の手順をグループ内で伝え合い、どの手順が簡単で分かりやすく正確にかけるか話し合わせる。</p> <p>↓</p> <p>◎円の性質を活用し、二等辺三角形の作図方法を生かして、コンパスを用いて作図する方法を説明する。</p> <p>↓</p> <p>○コンパスのよさに気付く。コンパスを使って正三角形の作図ができる。</p>	<p>・個人の作図活動では、既習の作図方法の適用を考えさせたい。</p> <p>・学び合いを通して、円の性質や既習の二等辺三角形の作図方法、コンパスの有用性などに着目したそれぞれの知識・技能を教師がつかないでいくことで、学びを深めていきたい。</p> <p>・コンパスを用いた作図を通して、図形の見方・考え方とコンパスの有用性をつかませたい。</p>

③事前検討会や模擬授業の実施

- ア 指導案検討や模擬授業で検証の観点を共通理解しましたか。
- ・指導案検討では、研究主題、研究の視点、具体的手立てと授業展開の整合性を確認しましょう。
 - ・模擬授業で、教師の発問や具体的手立てによる児童生徒の反応が、検証の観点になっているか確認しましょう。全体で検証の観点を共通理解するためにも、具体的手立てを重点化して模擬授業をすることもあります。



研究の視点にばかり目が向いてしまい、本時の目標（ねらい）からずれてしまわないように気を付けましょう。「研究ありきの学びなし」にならないように注意しましょう。

(2) 研究授業の実施 (D o)

①研究授業の役割分担の工夫による協働意識の高揚

- ア 協働で役割をもつよう研究授業の分担を工夫しましたか。
- ・研究授業を多面的・多角的に分析し、指導法の有効性を明らかにしましょう。授業をより客観的にとらえ、児童生徒一人一人の学びを大切にするためにも、分担して授業観察・授業記録をしましょう。
 - ・どのように意見集約していくか、事後検討会のもち方も考えておきましょう。また、検討会后に、検証結果をまとめ、発信する役割も決めておくといいです。

全体記録、教師の発問や手立てに対する児童生徒の反応、分析対象児童生徒の観察や動画での授業記録などを分担することで、協働での授業づくりの意識を高めましょう。



(3) 研究授業の検証 (C h e c k)

①検証方法の工夫

- ア 検討会のもち方を工夫していますか。
- ・協議内容や作業時間、参加者の教科や年代等を考慮し、研究協議の方法を工夫してみましょう。学年別グループや教科別グループ、年代別グループなどでの協議も考えられます。
 - ・授業参観カードを用いて全体で話し合う方法や、付箋紙等を用いて成果と課題を類別していく方法など、協議の仕方はいろいろあります。検証のねらいに合った方法で取り組みましょう。

- ・自由な意見交流からよりよい考えを創造できるようにすることで、協働性が高まっていきます。また、授業者だけでなく、教員一人一人の授業の観察力や構成力も高まっていきます。



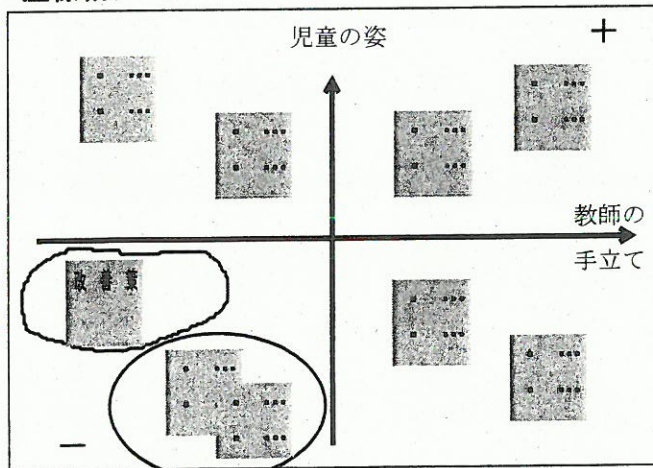
協議内容を「見える化」することで、短時間でも全体での共有が図られます。学校訪問等でも積極的に活用してみたいはいかがでしょうか。

・マトリクスシート

	検証の観点1	検証の観点2	検証の観点3
成果			
課題			
改善策			

- ・マトリクス表を用います。
- ・行には「検証の観点」など、列には「成果」と「課題」、「改善策」などを設定します。
- ・付箋を整理しながら焦点化していきます。
- 校内研究等の視点検証に有効です。
- 事前に検証の観点を共通理解しておくことが大切です。

・座標軸シート



- ・縦軸と横軸の二次元軸を設定します。
- ・それぞれの軸に検証項目を設け、正負領域で付箋を整理し焦点化していきます。
- ・焦点化した内容の改善策を協議していきます。
- 校内研究等の視点検証に有効です。
- 検証の観点に沿って、複数のシートが必要になります。

・指導案拡大シート

段階	学習活動・発問・反応	具体の手立てと検証の観点	改善策
導入			
展開			
終末			

- ・指導案の流れに沿って付箋を整理します。
- ・授業の流れの中から協議事項を焦点化します。
- 初任者層の授業づくりの検証などに有効です。
- 協議が拡散してしまわないように、検証の観点に沿って協議事項を焦点化することが大切です。

(4) 授業改善の視点の整理と次の授業へのつなぎ (Action)

①研究の視点に沿った情報の整理

ア 継続した情報の整理ができていますか。

- ・事後検討会では、研究の視点が適切だったかどうかについて話し合いがもたれます。検証計画に沿って、児童生徒の発問に対する反応やノート、学習活動への取組の様子などから、具体の手立てにおける成果と課題をまとめましょう。
- ・児童生徒の変容を客観的なデータから捉えることも大切です。集団としての変容と個での変容を、研究授業の事前・事後の意識調査や学力調査からも整理しましょう。
- ・月ごとや学期ごとに、研究授業等における成果と課題を整理しておきましょう。

イ 日々の授業実践からも、研究の視点における成果と課題を整理していますか。

- ・校内研究は、日々の授業実践とつながって意味あるもの、価値あるものになっていきます。校内研究の成果と課題は、研究授業だけでなく、日頃の授業実践から得ることが多くあります。視点に基づくそれぞれの実践についてその都度整理してみましょう。授業記録として週案などの活用も考えてみましょう。

研究の視点の成果と課題を見極めていくには、何と言っても教員の見取りが大切になります。児童生徒の反応、変容を検証の観点に沿って協働で見取っていくことで客観性のある分析ができます。そして汎用性のある指導実践へとつながっていきます。



②研究の視点に沿った情報の発信

ア 次の実践につながる情報の発信ができていますか。

- ・それぞれの研究授業や日々の授業実践を、1本の線につないでいくことが大切です。検証の観点に沿って整理した情報を、研究だよりや研究掲示板などを使って積極的に発信し、共有しましょう。学校のホームページなどを活用し、校内だけでなく、家庭・地域に発信していくことも考えられます。



研究主任が一人で頑張っても協働性は十分に発揮されません。情報を分析するチーム、情報を整理するチーム、情報を発信するチームなど、協働的な研究組織を生かした振り返りをしましょう。

③改善策を生かし、研究授業の指導案をつくり直しましょう。

- ・協働でつくりあげた授業を活用するには、検討会で出された改善策を基に、改めて指導過程を協働でつくり直してみましょう。新しい視点からの指導過程ができあがるはずです。それが、協働で取り組んだ教員の貴重な財産になります。校内研究であれば、再構成した指導案という形で次の研究授業につながります。
- ・研究授業は「研究のための授業」だけではありません。日々の授業づくりのアイデアを発掘する場であり、自分の授業力を振り返る場でもあります。授業改善の視点を全体で整理し、日々の授業に生かしていきましょう。

改善策を踏まえて指導案を再度つくり直すことは、教員の大きな教育財産になります。初任者層の教員に目に見える形で、この財産を引き継いでいくことを大切にしましょう。



6 実践を振り返り研究のまとめをしましょう

(1) 協働による分析・考察

協働で練り合いを重ねながら、校内研究の成果と課題を中心にまとめてみましょう。話し合いが個→小集団→全体と流れていくよう、事前に研究推進委員会等でレジュメや記入用紙の検討、日程の検討や確認を行っておきましょう。また、各々が成果と課題を考える段階までに、客観的なデータの分析・考察が済んでいると客観的で深い考察が可能となります。

①各自でのまとめ

視点とその手立てに沿ってまとめてみましょう。視点に基づく成果と課題が考察できるようにその根拠も文中に入るよう意識します。

また、視点及び手立て以外の成果や課題・効果等（例えば運営方法、視点からは少しずれるがこんなこともよかった）等をまとめておくとその後の話が広がります。

②学年や教科群など小グループでの検討



各自が考えたものを持ち寄り、成果と課題について深めていきましょう。その際、成果や課題について、検証の観点を基にまとめましょう。

みんなの意見を吸い上げて分析・考察することが大切です。参加メンバー全員が必ず発言するようにしましょう。

(2) 研究のまとめ

①全体の話合い（研究全体会）のまとめ

全体での話合い（研究全体会）では、主に以下の事柄について検討してみましょう。

ア 仮説や視点は、主題・副主題を検証するのに有効であったか。

成果と課題の共有を図りましょう。

イ 授業実践によって子供に変容が見られたか。

年度当初に立てた「目指す児童生徒像」と、まとめ段階での「児童生徒像」を照らし合わせ、伸びた点と伸び悩んでいる点を確認しましょう。次年度の計画構想（グラウンドデザイン）につなげることができます。

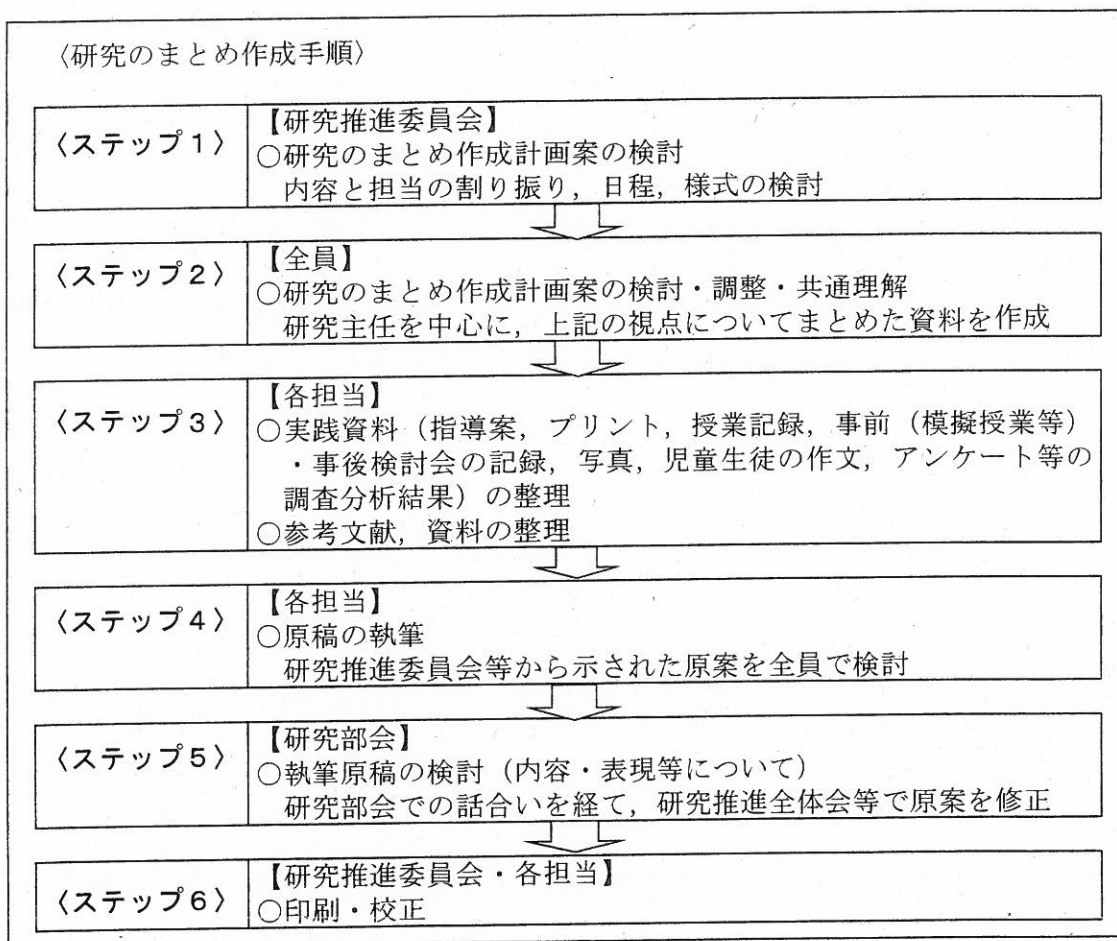
校内研究の運営全般についても評価のチェックシート等（p17参照）を使って共通の観点で見取りましょう。



(3) 「研究のまとめ」(研究紀要, 研究実践集録等)の作成

研究のまとめを作成することで1年間の校内研究の足跡が「見える化」され、より深く振り返ることができます。また研究目標がどの程度達成されているか、どんな手立てや支援が有効だったかを振り返ることで授業改善や授業力向上のポイントを見いだすことができます。さらに児童生徒の変容から今後の指導の方向性を見取り、それらをみんなで共有することができます。

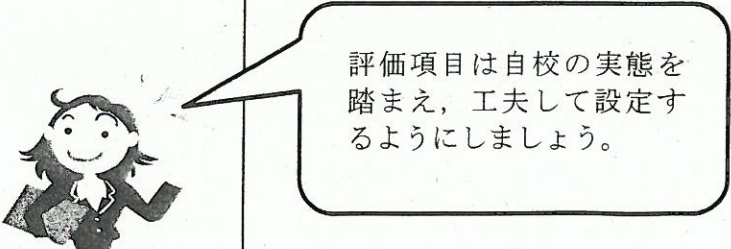
研究のまとめを作成する際の流れとしては、以下のようなものがあります。それぞれのステップで、役割分担等を行い、協働的にまとめをしていくことが大切です。



(4) 「研究のまとめ」(研究紀要, 研究実践集録等)の発信

作成した「研究のまとめ」を学校ホームページ上に掲載することで、保護者や地域への教育活動の公開にもつながります。また、近隣の小・中学校と「研究のまとめ」を交換することで、お互いの校内の状況や共通点を知ることができます。積極的に情報を発信し、校内研究の更なる深まりを求めていきましょう。

(資料) 「校内研究評価シート」 (例)

項目	評価項目	評価			
① 課題把握	ア 児童生徒の実態から把握した切実なものだったか。	4	3	2	1
	イ 課題が分析され、焦点化・共有化されたものか	4	3	2	1
② 研究体制	ア 研究組織を確立し、計画的に研究を進めてきたか。	4	3	2	1
	イ 各々の能力が生かされる協働的な研究組織がつけられていたか。	4	3	2	1
③ 研究主題	ア 研究目標は、学校教育目標との関連が図られていたか	4	3	2	1
	イ 共通理解され、教職員が研究の意欲をもてたか。	4	3	2	1
④ 研究の視点	ア 視点検証のための手立てが適切であり、教職員に理解されたか。	4	3	2	1
	イ 研究の範囲や実践に取り組む手立てが明確であったか	4	3	2	1
⑤ 研究計画	ア 研究日程は、学校行事等を考え、無理なく設定されたか。	4	3	2	1
	イ 手立ての検証が行われ、その成果が累積される計画であったか	4	3	2	1
⑥ 研究の取組	ア 研究の成果が日々の実践に生かされたか。	4	3	2	1
	イ 研究に取り組む時間の確保がされたか。	4	3	2	1
	ウ 事前に模擬授業に・・・	4	3	2	1
⑦ 成果の活用	ア 児童生徒がどのように変容したかを明確に把握できたか。	4	3	2	1
	イ 研究全体に一貫性・整合性があり、活用できる研究のまとめを作成することができたか。	4	3	2	1
特に良好な点・改善点とその方策について記入してください。					
良好な点 (番号)			改善点とその方策 (番号)		
			評価項目は自校の実態を踏まえ、工夫して設定するようにしましょう。		

参考文献

- ・群馬県教育研究所連盟編著『改訂新版 実践的研究の進め方ー創意工夫を生かした教育を求めてー』東洋館出版社，2001
- ・宮城県教育研修センター『～子供たちの学力向上を目指して～ 校内研修ガイドブック』2003
- ・岩手県立総合教育センター『校内授業研究の進め方ガイドブック』2007
- ・千葉県総合教育センター『校内研究ガイドブック ■授業力アップ■』2009
- ・鹿児島県総合教育センターWebサイト『授業力を高める校内研修の進め方ーみんなで取り組み，学び合う授業研究』を通してー』2014
- ・福岡市教育センターWebサイト『みんなですすめよう ふかめよう 校内研究』
- ・函館市教育委員会『指導力の向上を図る校内研究の充実のために』2006